

コロナ禍における声楽講座とピアノ講座の動向

—コロナ後の音楽講座の将来的役割像を求めて—

中野陽子（声楽家）

三上香子（大人のピアノ研究会代表）

はじめに

私たちは『社会教育学研究』（高野山大学社会教育学研究室）第53号において、新型コロナウイルス感染症（COVID-19、以下コロナ）禍におけるピアノ及び声楽講座の2021年6月までの動向を報告した。本論はその続編であり、コロナ第6波を迎える2022年1月までを、声楽講座の中野陽子が、三上香子から提供されたピアノ講座のデータ及び考察を参照し、受講生数の増減等を軸にまとめたものである。

成人の生涯学習には様々な学びの場が設けられている。声楽とピアノ講座もまた、学びの場のひとつとして機能する。音楽分野は関心が高く、なかでもその代表格にあげられるのが歌唱やピアノの講座である。これら二つの講座は、世の様々な業務と同じく、度重なる緊急事態宣言発令に伴う休業要請に従い休講と再開を繰り返した。人の集う講座であるため、マスク・手指消毒・換気・距離の確保等の感染対策を徹底し、クラスターの回避に今なお努めている。声楽講座は感染リスクそのものである発声を主体とし、演習と予防のバランスをとった運営の見極めが欠かせない。

音楽之友社の音楽辞典(p.275,1954)の楽語によれば、声楽とは「音楽を大別して器楽と声楽に分けるが、声楽とは、肉声をもってする音楽」とある。楽器とは原始、人類が骨で作った笛が源流のひとつであるように、ヒトの産み出した音楽表現の道具である。声楽は、人に必ず備わる声で奏でる。ピアノは、広く世に最も普及する楽器のひとつである。これら音楽演奏を代表する二つの講座の動向は、コロナ禍の音楽界全般の社会現象とも重なりと考える。

受講生の動向を記した本論が、未来へ手渡すコロナ禍の音楽現場のひとつの記録となることを期待しつつ、声楽とピアノ講座の報告を通して、今だれもが模索するコロナ明けの未来の有り方を求めてゆきたい。

両講座は、難易度の高過ぎるものや特殊な楽曲は避け、広く世に普及する親しみやすい世界名曲や愛唱歌やクラシック等の楽曲の習得を主としている。専門家養成の過程は設けていない。前出の業務母体 A カルチャーについて、感染対策における運営方針に大きな変更は無く従来通りであるため、こちらへのアンケート調査については、今回は省略する。

1. 声楽講座の動向

(1) コロナ第5波及びそれ以降の社会的状況と講座の動向

以下、小見出しのさらに細かい見出しは、a,b,c,…をやめて ①②③…に修正

① コロナ第5波(2021年6月21日～10月半ば)

大阪府は、6月21日からとする第5波が、感染者の増加ペースにおいて、第4波を上回る勢いであると発表した。第5波の感染者数は春の4波を大きく上回ったが、高齢者のワクチン接種が進み、病床などが拡充され、死者や重症者は減ってきた。

講座は、第3次緊急事態宣言による休業要請に従い休講したが、再延長とされる6月1日から20日までの期間は休講せず、再開に至った。

発声の感染リスクの高さとコロナへの脅威から、復帰する受講生の数は、コロナ前と比べると半減した。事務担当者も「受講生復帰の見込みはこれからも望めず、激減したままで推移するだろう」との見解を示した。しかし、わずかに残る受講生は休まず通い続けた。この頃、彼らからよく聞いた言葉に「休みたかったけれど、がんばって出てきた」「家でじっとしていたら精神的にまいってしまう」等があった。

外出自粛の続くなか、講座は、唯一の外出の機会として学習や交流や生活のリズム作りの場となった。平常時であれば、講座が終われば受講生同士、ランチやティータイムを共に楽しんだが、コロナで会食は皆無となった。これが示すように、声楽講座に通う目的は、純粋に歌い学ぶことへと焦点が絞られてきた。

② 緊急事態宣言(2021年8月2日～9月30日)

大阪府感染症情報センターより「2021年7月30日に新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づき、大阪府に4回目の新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発出されました。実施期間は2021年8月2日から9月30日までです」との発表があった。

しかしこの時期、受講生のワクチン接種済は大半で、感染対策も日常に定着したので、緊急事態宣言によるAカルチャーの休業は無かった。受講生からは「いつか戻ってくる仲間の居場所を守っておく」という言葉も聞かれた。消えていく講座の多い中、わずかに残る受講生が声楽講座の存続を可能にした。

9月30日をもって19都道府県の緊急事態宣言及び8県のまん延防止等重点措置の全てを解除し制限を段階的に緩和。このころから、講座復帰の受講生が目に見えて増えてきた。通い続けた受講生の歓迎を受ける場面があちこちで散見された。復帰した受講生は、休んでいた間も、コロナの状況が落ち着いて戻れる機会を見定めていたようだ。彼らからは、「感染者も少なくなったし、今しかないと思って戻ってきました」「ずうっといつも講座に戻りたかった」などの声が届けられた。また気負わずフラリと舞い戻った復帰者も、通い続けた受講生の歓迎のおかげで、以前の状態にすぐに溶け込めた。

③ コロナ禍でのコンサート(2021年11月5日)

感染状況が落ち着いた秋、昨年のコロナ・リスタート応援企画コンサートにひき続き、音楽会を開催した。本コンサートは市の助成を得た公的事业であった。緊急事態宣言が明けての開催ではあったが、他の様々な催事と同様に、会場予約時は開催か中止かの予断が許されない状況にあった。

無事開催に至ったコンサートでは、感染予防や入場制限などをさらに強化し、安全を期した。出演者は準備段階から、平常時以上に、事業の役割分担や演目の選曲などに積極的に参画し協力しあった。また企画するプログラムは声楽だけでなく、器楽アンサンブルや能の朗読劇など横のつながりのある演目が加わった。無事参加が果たせるよう、普段以上にだれもが体調管理に気を配った。コロナによって開催が危ぶまれる状況ではあったが、参加にエン

トリーした者はみな、本コンサートを前向きに捉えていた。本番では、奏者は晴れ舞台を、聴衆は鑑賞を楽しみ、音楽会という非日常を満喫したようであった。懸念のクラスター発生も無かった。市から依頼のアンケートを回収した結果、「目的や内容・運営や対応・総合的な満足度」などの各項目で、大変満足とやや満足を合わせた ほぼ全てに「満足」の回答を得ることができた。長年コンサートに携わった筆者の実感からも、本コンサートは、コロナ禍を通して参加者が平常時以上に音楽することの有り難さに気づき、丁寧に音楽と向き合えた稀な機会であったといえる。

④ 第6波の入口(2022年1月初頭～)

2021年秋から年末にかけて第6波の予兆を感じながらも、コロナの状況は比較的落ち着いたままだった。2022年の初頭から、オミクロン株の蔓延に伴い感染者は再び急激な増加傾向に転じた。現時点では、第6波に伴う5回目の緊急事態宣言発令は未知であるが、声楽講座においては受講生の一定の定着もあって休講再開時の動向は現状維持が予想される。

(2) コロナ禍の受講生の動向を俯瞰して

受講生数はコロナ禍で自然淘汰され半減したが、声楽を続ける意志を持つ者が残り、講座を構成する岩盤支持層の存在があらわになった。能動的で積極的な者や受動的で淡々とした者など、受講態度は様々であるが、この岩盤支持層に共通するのは、声楽練習や趣味の研鑽を、暮らしのリズム作りとして生活に根づかせ、生涯の学習と位置付けて軌道に乗せることができたということである。声楽の「感染リスク」と「学習のメリット」を比べ、彼らはメリットの方を選択した。声楽を能動的にとらえ、コロナ禍を乗り越える糧としたと推測する。前稿で示した新規入会者もこの層に属する。声楽を始める際の、発声という感染リスクへの判断と覚悟が、学習の継続を可能にしたと思われる。

声楽を開始する際に、猛暑の夏、解放した窓から熱風の吹き込む環境で、マスクで歌う口元を覆い、熱中症や酸欠の不安を抱えながらも、受講生は練習に取り組んだ。寒い冬にも窓を開放し扇風機を作動させ空気を入れ替えて、衣服で寒暖を調節しながら、口元をマスクで覆って歌った。発声から生じるエアロゾルの感染対策の換気でありマスクであった。過酷な学習環境で、幾度かの緊急事態宣言の中断と再開を繰り返しながらも、彼らはやめることなく通った。この受講の態度が、声楽学習の岩盤支持層の存在を証明する。また、今後戻ってくる仲間のための居場所を守る意識がこの層において芽生えたことから、講座の存続に積極的にかかわる姿勢も示された。今後この層が、声楽講座を活性化させ牽引してゆく推進力になるとと思われる。

歌によるコミュニケーションを求めた者の多くは独居者であり、これは外出自粛に起因する。日常の会話量が減って発声の必要性を感じたというコロナ禍ならではの理由があった。同じ趣味を持つ仲間との合唱は精神を高揚させる。筆者は、声楽の発声リハビリの可能性について既に発表した(中野, 2016)。さらに、コロナが及ぼす肺への影響について、声楽家の体感と知見からも、歌唱は肺のトレーニングに有効であると言える。

さらに、人とのふれあいが極端に減り、講座に通うことが唯一の外出の機会になったという声もよく聞かれた。社会でテレワークの利便性が認められ普及した反面、リアルな場の生の触れ合いと運動の機会が求められたのも事実であった。かように、コロナ禍で声楽講座の

担う役割は多様である。

(3)声楽の力

声楽は自らの身体を楽器とするため、歌い演じ自己を開放することで爽快感が得られる。この状態は多くの人々が、「声を出して歌うとスッキリする」といった感覚に集約される。古来、音楽の楽には「癒す」という意味があり、声楽も同様に「癒し」の意味を持つ。

「音楽」は音が楽しいと書き、「声楽」は声(発声・歌)が楽しいと書く。また「楽器」とは楽しい器と書く。声楽は身体を楽器とする。この器を何で満たし、器から何を繰り出し、音楽としての自己表現とするか。個人の紡ぎ出す音楽と表現は、喜怒哀楽の情感はもとより、このコロナ禍に培われた経験や人生哲学をも語る。これらに対し、演奏スキル(技術)を駆使して、芸術に昇華してゆくことは、声楽演奏に課されたミッションに通じる。

筆者(中野)は、声楽の恩師・故嘉納愛子氏のレッスンにおいて、「野ばら(作曲：山田耕筰)は宗教的な歌曲であり、哲学をもって歌いなさい」と、口頭による指導を受けた。また、氏からは、その恩師 山田耕筰の「音楽は宗教なり」の言葉も託された。これらは、耕筰から直接レッスンを受けた嘉納氏が、声楽の弟子たちに語り継いだ口伝とも言うべきものである。「次はあなたが生徒達に伝える番ですよ」と、私たちが後進のレッスンの際に負う役務も示された。哲学や宗教という究極の境地に達した山田耕筰は反面、誰もが童謡として口ずさみ、学校の共通教材ともなった「赤とんぼ」を作曲した。このように楽曲に潜む精神性が、演奏する者と聴く者の心を、癒しと慰めへ導くと考える。

さらに筆者(中野)は、講座の指導者であるとともに舞台上で歌曲を披露する声楽家であるが、全身全霊で奏する時、宇宙の摂理に沿い全てが調律される感覚を覚える。これはスポーツで言うと、心技体が統一され、ゾーンに入った状態であり、声楽家がアスリートと称される由縁と解釈する。

専門とする声楽と芸術を掘り下げると、自身の習熟の経験から、演奏を極めてゆく過程に次の段階があった。①調律 ②自律 ③自立である。

レッスンを繰り返し演奏が自分のものになった時、宇宙の摂理に沿うような精神と身体の調律するような感覚を覚えた。さらに練習を重ねると、楽器である身体と精神を律して演奏することが可能になった。この境地に至って練習を積むと、華やかさとは裏腹に孤独な舞台上で自立して、聴衆に音楽芸術を届ける演奏の醍醐味が味わえるようになった。声楽演奏に身体と精神の働きは欠かせない。声楽は、かように精神と身体の融合を基とする。

以上、これら身体と精神融合の声楽的歌唱の認識に、受講生の動向を重ね合わせると、声楽講座はコロナ禍において、受講生の心と体の健康管理の役割の一端を担ったと言える。歌唱法の習熟や上達はもとより、発声のリハビリや仲間とのふれあいに動機があったとしても、これを導入に、声楽の習得を人生の軌道に乗せて生涯の学習へと導く可能性が期待される。

2. ピアノ講座の動向

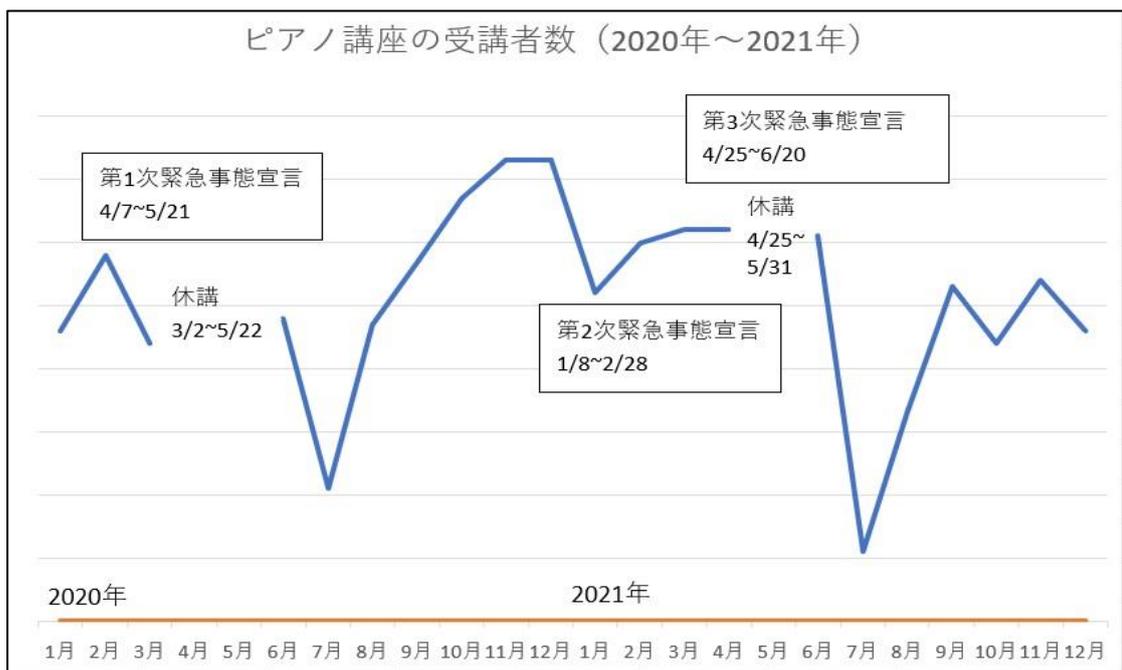
(1) A カルチャーセンターのピアノ講座と感染防止の取り組み

前稿¹⁾で示したように、A カルチャーセンターのピアノ講座では、60歳以上を対象にしたグループレッスン（脳の活性化をめざすコースと演奏を中心としたコース）と、受講者が弾きたい曲を指導する個人レッスンが開講されている。また2020年には、初心者を対象にピアノの基礎を学ぶ「超初心者生のためのピアノ講座（全3回）」や、3カ月限定の早朝グループレッスンも開講された。

ピアノ講座での感染防止の取り組みは、昨年よりピアノ鍵盤の専用除菌剤「キークリーン」と、キーボード清拭用のウエットティッシュが設置されている。また受講者には入室時の手指の消毒とマスクの着用が義務付けられていることも、とくに変更はみられない。なお窓の開放については、空調の関係と音漏れへの配慮から、現在は30分に1回の換気を行うことで対応している

(2) ピアノ講座の受講者数の増減

下記の図は、2020年1月から2021年12月までの2年間のピアノ講座の受講生数の増減を、グラフにしたものである。



はじめに、入会については、2020年7月から12月に急速なひとつめの増加と、2021年1月から4月にゆるやかなふたつめの増加がみてとれる。ひとつめの増加は、第1次緊急事態宣言のあと大阪モデルが設定され²⁾、日々感染状況をみるなかで感染数がやや落ち着いた時期である。ふたつめの増加は、春になるとコロナが終息するのではないかという期待が入会に

¹⁾ 三上香子・中野陽子「コロナ禍におけるカルチャーセンターの音楽講座の動向：音楽講座とピアノ講座を中心に」『社会教育学研究』第53号、2021年。

²⁾ 大阪府が感染拡大状況を判断するため、府独自に指標・基準を設定したもの

結びついたのではないかと思われた。なお大阪府は、緊急事態宣言後の期間をまん延化防止措置とし、通年に渡り不要不急の外出の自粛を要請している。しかしそれにもかかわらず入会が増加していたことから、入会においては、まん延化防止措置の影響はあまりうけていないと考えられる。

次に、図からは、2020年7月と翌年の2021年7月には多数の退会がみられる。これは、Aカルチャーの休講措置との関連性が考えられる。例えば大阪府の緊急事態宣言は、3度発令された。それに対しAカルチャーでは、1度めと3度めに休講措置がとられた。図からは、休講措置がとられたあとに大幅な退会がみられる。したがってピアノ講座の退会には、休講がきっかけになったと考えてもよいだろう。以上が図からみた大阪府の要請とピアノ講座の受講者数の増減である。

(3) 学習意欲の低下と退会の関連性

次に、2021年7月の大幅な退会について、学習意欲の低下の視点から考察する。以前筆者(三上)は、「ピアノ初心者の学習意欲は、学習開始後半年から2年未満に低下する」と述べた³⁾。これは、コロナパンデミック以前に実施した実験結果から導かれた仮説である。この説をもとに2020年7月以降に急激に増えた新入会者が約1年で退会したとするならば、それは学習意欲の低下が一因であったとも考えられる。

また、前稿ではコロナ禍の入会者の特徴として、「自粛期間の暇つぶしとして少しピアノをやってみたかった」という学習動機をもつことが示された。かれらは、国のコロナ対策により発生した強制的な余暇に対してピアノ学習を選択したため学習意欲があまり高くなく、長期的な学習を望まない入会者だと考えられる。そこで、かれらの多くが2021年1月に入会し、学習意欲が低下したちょうど半年後に退会したとするならば、2021年7月の大幅な退会者数は妥当であるといえるであろう。

(4) コロナ禍における学習支援とまとめ

これまで筆者は、コロナ禍の入会者には、学習意欲があまりなく、長期的な学習を望まない特徴をもつと述べ、退会にはAカルチャーセンターの休講と、ピアノ初心者の学習意欲の低下期間が関連していると推測した。しかし、それでは退会は必然的であり、しょうがないことだと結論づけてしまうことに他ならない。なお筆者は前稿で、コロナ禍に入会した受講生には、従来とは異なる学習支援の必要性が考えられることを示唆した。もし学習意欲が低下した受講者に対して、適切な学習支援がおこなわれていたのならば、かれらが早期に退会することは避けられたに違いない。

そこでコロナ禍における受講者への対応を省察してみたところ、確かにコロナ禍の新入会者に対しては、通常より丁寧な指導や言葉かけをおこなっていた。しかし、具体的な学習支援の方法を見出すまでには至らなかった。このことから、ピアノ講座におけるコロナ禍における学習支援は不十分であったと言わざるをない。

³⁾ 三上香子「初見演奏能力からみたシニアへの効果的なピアノ指導(2)：年齢別、経験別、年数別の調査結果を中心に」『関西教職教育研究』第8号、26-34、2020年。

本稿は、思いがけず、ピアノ初心者の学習意欲の低下期間に関する仮説の裏付けとなった。なお、コロナ禍における新入会者への学習支援については、早急に具体的な指導方法を構築する必要があることがあきらかにされた。

3. コロナ禍が及ぼす受講生数への影響のまとめ

コロナ禍におけるピアノと声楽講座の動向を、受講生数の増減をもとに照らし合わせると、両講座への緊急事態宣言による休講の影響は、対照的な形で現れた。

先ず声楽講座について、受講生数は時系列の文脈に示されたとおり、減少したままで推移した後、再び緩やかな増加傾向をたどる。ここから中野は、「学習を生活の一部として定着させた受講者の岩盤支持層の存在」を抽出した。

次にピアノ講座について、受講生数は図表に示されたとおり、急激に増加した後、再び減少傾向に転じる。これについて三上は、「コロナパンデミック前にたてたピアノ初心者の学習意欲低下の仮説を、コロナ禍の受講生者数の増減が裏付けた」と分析した。

両講座において受講者数に増減はあったものの、継続する意志を持つ一定数は、今後も社会的状況に左右されず学習を続けることが予想される。一方、外出自粛の影響で従来と異なる動機を持つ新入会者の学習意欲への具体的支援と指導の方法は、今後に求められる課題である。人の集う場にもかかわらず、両講座のクラスター発生は0(ゼロ)であったことを申し添えておく。

4. コロナ明けの未来に向けて

コロナ禍は、外出自粛いわゆる「おうち時間」の増えた社会において、家に眠るピアノの活用や会話の代替としての歌唱という平常時とは異なるニーズによる、受講者のすそ野の広がりを提供した。今後しばらくは続くであろう感染症と隣り合わせの非日常に、精神と身体の健康管理は欠かせない。健康について、世界保健機関(WHO)が国際的にウェルネス(Wellness)の意義を提示するが、琉球大学の荒川はより踏み込んで、「身体の健康、精神の健康、環境の健康、社会的健康を基盤にして、豊かな人生をデザインしていく自己実現である」と、新たに定義づけた(荒川, 2017)。この定義が示唆するものは、ウィズコロナそしてアフターコロナに向けての、音楽演習が担う新たな役割の可能性である。

参考文献 以下、書名は『』でくくりました。

荒川雅志『ウェルネスツーリズム サードプレイスへの旅』フレグランスジャーナル社, 2017

堀内敬三・野村良雄『音楽辞典 楽語 音楽之友社』p.275,1954

大阪府健康医療部『第一波から第五波までの感染療養状況のまとめ』2021年10月21日

中野陽子『声楽が及ぼす心身への健康効果』発達人間学論叢 第20巻, 2016

三上香子・中野陽子『コロナ禍におけるカルチャーセンターの音楽講座の動向』社会教育学研究 第53号, 2021

※ ピアノ講座は、脚注として標記